いちぶんのいち

いちぶんのいち

むと

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23138685

`R-18`, `RK1600`, `51×60`, `5160`

RK1600フェス2024開催おめでとうございます！当サークルの展示作品はさっくりほろほろ1600です🤲

⚠ふたなり60。書き手は51×60のつもりですがどちらもお互いに挿入し/されています。なんでも許せる方向け❗

かわいくな〜れの一心で書きました！お楽しみあれ〜🌟💫

Table of Contents

いちぶんのいち

800/800（いちぶんのいち）

△▽△

「今日はぼくが女の子ね」
　目を細めて笑ったコナーは、60の腰をしたたかに掴むとそのままパタリと後ろへ倒れた。必然的に、60を腰へ跨らせるかたちとなる。しかしながら、主導権を譲られたというのに依然として60の顔は晴れないままだった。

「ねえ、どうしたの？早くシよ。待ちきれない」
「〜〜っコナー、お前は……」

　困り果てたというように眉間を揉んだ60が、深くため息を吐いた。彼は知っていた。
——コナーがこんなことを言う日は碌なことにならない。
　一見、60のほうへ主導権を譲ったかに見えたコナーはしかし、彼の好きにさせてやる気などほとんどないも同然だった。実に無邪気で、悪気のない様子のままその所業をしてくるからたちが悪い。まるでそれが当然であるかのような顔をして、コナーはどさくさに紛れて60を組み敷いてくるのだ、いつも。彼に遠慮という概念はない。そして、60自身、同型機であるはずのコナーによる丸め込みには、どうにも敵わないところがあった。

△▽△

「ぁ、ア、あッ♡」
　ずぷりと60の雄を飲みこんだコナーが、甲高い声をあげてよがる。けれど60の内心は複雑だった。素直にこの状況を喜んで、楽しめればよかったが、現実はそうはいかない。性器パーツから伝わる

変換済みの電気信号が否応なしに電脳へ快楽を訴えかけてくるはずなのに、手放しでそれに身を委ねられない。言い換えればその状況は、彼にとっては生殺しも同然だった。
　最新技術を詰め込まれたマシンは有能なもので、コナーによって何度も繰り返された経験と報酬のサイクルを忘れることはない。いつでも優位に立って、有無を言わさずに自分のいいようにしてくるコナーに対して苛立ちがないわけではなかった。しかし、これから与えられる報酬への期待感が全てを塗りつぶしてしまうのだった。
「ん、はあっ、60♡きもち、いっ？」
「ハ、ぁ……コナー、お前、は……」
　とちゅとちゅと軽快な腰使いでコナーを揺さぶる60のこめかみでは、赤いLEDが点滅している。時折60の動きが乱れて逸れたところを刺激されると、そのたびにコナーは「あん♡」と巫山戯た甘い声をあげて身をよじった。彼らは意図的に作り出された偶然性を楽しんでいる。ことにこうした営みにおいては、それは特に重要なことであるとの意見をコナーと60とは一致させていた。半ば強引に、コナーが60に教え込むかたちではあったが。
「きみっていっつも、そればっか……ぁ、もっと色んなの試してみようよ、たとえば、これとか、っ！」
「うわっ！？」
　宙に浮いていた両脚で60の背中をホールドしたコナーが、強くその脚に力を込めた。コナーと同じ体格の60はおかげでするりと引き寄せられ、同時に結合部がより深くハマり込む。
「ン゛う……♡」
　先ほどまでよりも深い位置に60のものが達し、コナーは快楽に浸るように目を閉じて眉を寄せた。コナーの好き勝手な行動に翻弄されるしかない60は気が気ではない。
「ほら、きみもやってみて？大丈夫、失敗しないから」
「そ、そういう問題じゃあないだろ」
「やってみなきゃわかんないよ。ホラ早く」
　奥のほうで60を食い締めたまま、コナーは腰を揺らしてきゅう、と彼のものを食んだ。それだけで、60が下瞼をひくつかせる。
「……お前の奔放っぷりにはほとほと呆れた。振り回されるこっち

の身にも、なって、みれば……いい、っ」
　ふうと長く息を吐いた60は、コナーの腿に手をかけるとずんと強く突いた。コナーが歓喜に震えながら身をよじり、背を逸らし、なまめかしく素肌が晒される。小さく控えめな胸飾りがピンと立って主張しているのが見て取れた。
「ぁ、ぁあ！ん、つよ、い、気持ち、いっ……♡！」
「僕が言う通りにしようがしまいが、はあっ、お前の喜ぶ展開にしかならないから、っ付き合わされるこっちはムカムカくるんだぞ……！」
　60は眉間に深く皺を刻んだまま、LEDを暴れさせて声を荒げた。その大胆でありながらも粗暴になりきれない腰使いが、コナーにとっては物足りない。
「ぁは、むかむか、しちゃうの……っ？……ほんとだ、んう、そういう顔してる……」
　はあはあと人の呼吸を模倣して肩を上下させながら、頬をほてらせたコナーがうっそりと同じ色の瞳を見上げた。
「……60、じゃあチュー、しよ？むかむかするの治してあげる……」
　焦茶色の視線に絡め取られた60は、ゆっくりと伸ばされたコナーの片手に、磁石のように引き寄せられていく。彼がハッと気づいたときには、すでにコナーの両手でがんじがらめに抱きしめられた後だった。
「ちゃんと目、閉じてて？」
　鼻と鼻が触れ合うほどの距離でそう言われたものの、60は魅入られたように固まってしまっていた。コナーの片手が目の上に翳されてようやく、反射的に両目を強く閉じる。ほどなくして唇に触れたふにゃりとした感触は、今まで口にしたことのあるどんなものよりも甘美だった。歯列をたどりながらゆっくりと中へ押し入ってきた舌へ、歓迎するように自身のものをすり寄せる。そんなことができるのも初めの数秒だけで、その後はすぐに、コナーの手練手管に骨抜きにされてしまうのだった。
「ン、んう、ふ……っ」
　何を隠そう、60はコナーのキスに弱かった。個体ごとのセンサー

感度の違いはないはずだったが、どうもそれを信じることはできない。もしかしたら、コナーがそのあたりをいじっている可能性もあった。
「ぅ、んん、ン゛！」
　歯列をなぞって、奥歯をたどって、上顎をすりすりと撫でる。コナーのやり方は60にすっかり知れていたが、そんなことは問題ではなかった。むしろそのせいで、60の身体は反応せずにはいられない。
「んっ、ンン゛、ン゛〜〜ッ……！」
　60が自身の体重を支えている腕が、シーツの上でかたかたと震える。コナーはうっとりと目を開けて、至近距離で身悶える60を観察した。焦点距離の柔軟性はアンドロイドの良いところだ。ギュッと力の込められた60の瞼のふちに、涙が滲む。コナーはこの瞬間が好きだった。
「ン、んん、ッ〜〜〜〜♡！！」
　仕上げにコナーがじゅるりと舌を吸い上げると、60大きく身体を震わせて絶頂した。コナーは両腕で彼を強く抱きしめて、おまけにとろとろになった中を使って60のものを締め上げてやった。コナーの両手両脚で固定されているせいで身動きの取れない60は、否応なしにコナーの最奥で擬似的な精を放つ。
「はあ……君の、あっついね……♡」
　恍惚とした表情で60の射精を受け止めてやったコナーは、彼が落ち着くよりも先に、60もろともゴロリと転がった。サイバーライフ社製の大きな寝台はそれでもビクともせず、軋む音をたてることもなかった。
　60はとびきりのキスをお見舞いされた上に、うねる直腸(を、模した精巧な生体パーツ)に散々精を搾り取られ、放心状態だった。
　けれど、「そろそろ」だということはぼんやりとした頭でも理解することができた。コナーがポジションチェンジに持ち込むのはだいたいいつも、こんなタイミングだ。
「ぅ、あ……？」
　気づいたときには、60はコナーに見下ろされていた。研究所らしい白い光に照らされて、逆光になった表情はあまりよく見えない。

60はもう、これからどうにかなってしまうことが決まりきっているも同然だった。それと同時に、期待感に下半身のパーツきゅんと疼いたのは気のせいだと思いたい。
　60はいとも容易くシーツの上で組み敷かれ、すっかり熟れきった蜜壺に、コナーによってあたたかいものを宛てがわれていた。「温感センサー、オンにしてる？」コナーは息を弾ませながら言った。このセンサーによって擬似的な体温と、その変化を楽しむというのが彼らの中で密かなブームを巻き起こしているのは暗黙の了解だ。
　頬を上気させ、ぼうっとした目をした60が頷けば、コナーは微笑んで「良い子」と言った。たったそれだけで入り口がひくつくが、それを恥ずかしがるほどの余裕はもう彼には残っていなかった。

「ん、ぁ、あ、ぁぁあ……！」
　ずぶずぶとコナーが中へ押し入ってくる。柔和な態度とは裏腹に、やや性急な腰つきだった。本人は認めたがらないものの、60は彼のそういうところもかなり好きだ。
「はー……♡君ん中、あったかくてとろとろで、きもち……♡」
「っおい、言、うな、……ぁう……」
　せめてもの抵抗にと60は言い返したが、もはや意味を成していない。どうせこうなるから嫌だったのだ。コナーはいつも、主導権を60に与えてから奪うことで悦を感じている。みせかけの優位なら、せめて初めからないほうがマシだった。
　先ほどまでは元気だったはずの60の性器パーツは、今はすっかり萎れてふにゃふにゃに柔らかくなっている。アンドロイドにそういった感覚はないはずだが、なんとなく尊厳を踏み躙られるような感じがして嫌だった。
「やッやめ、こなぁ、〰〰っくう゛……！」
　コナーは60の中に入り込み、奥の方をぐ、と押し上げながら同時にしおれたペニスに手をかけた。60は弾かれたようにかぶりを振り、身をよじって抵抗したが、問答無用で人間で言うところの急所をその手に捕らえられる。アンドロイド特有の機能のひとつである、大量の性器からの分泌液によってぬるぬるになったそこはコナーにとって万全のコンディションを整えていると言えた。慣れた

手つきでにゅこにゅこと60のペニスをいじくり回しながらゆっくりと奥を突いてやると、60は泣きそうな声をあげながら思いきり背を反らす。背中がシーツから浮くせいで、体格にしては薄めの腹がこちらへ差し出されるようで目に毒だった。
「んッ……く、ッぅ〜〜！！」
　がくがく、と60が震える。射精はない。出さないまま絶頂したようだった。視界の端で、真っ赤になったLEDが狂ったように点滅する。
「ふふ、上手にイけたね……♡」
「はあッ、ぁ、はあ、ッ……ふう、」
　一瞬の沈黙ののちに、息を吹き返したようにせわしなく酸素を取り込もうとする(そういうプログラムなのだ)60を、コナーは愛しげに見下ろした。
「えらいえらい。さすが、ぼくの大好きな60♡」
「ふーッ、ぅう、う……？」
　絶頂したあとの60が正気を取り戻すのは通常よりも多少の時間を要する。その間に好き放題刷り込みまがいの言動をするのもコナーの日課だった。
「えらくて良い子の60なら、まだまだ付き合ってくれるよね……？」
「はあ、？はー……、ん……」
　ぼんやりした顔で頷いた60を見て、コナーはさらに笑みを深めた。
　のぼせた表情の60と同じくらい顔を赤くして、彼は据わった目を60へ向けている。爛々と輝く焦茶の瞳が、とても生き物ではないとは思えないほどだ。
　普段つんけんしている60がこんな様子になってしまうのはなんとも意外なことである。今日も、コナーはそれを自分だけが引き出せるということを確認しては人知れず悦に浸るのだった。

△▽△

「コナー……」

「ん……、うーん……？」
　恨めしげな60の低い声が音声プロセッサによって拾われる。それを聞いて、コナーの意識が擬似的な睡眠状態から浮上した。
　それは、眠い(という状態もプログラムで再現されたものだが)目をこすり、コナーが起き上がって伸びをしようとした、そのときだった。

「……い、いくらなんでも……！やりすぎだ！！！！！！！！！」

　コナーとほとんど同じ60の大きな大きな声が、建物じゅうにこだました。わなわなと震える拳の様子を想像するのさえ容易いほどの声量だった。それを聞いた研究員が、思わず背筋を伸ばしたとか伸ばさなかったとか。

△▽△

　各部位のジョイントと人工筋肉にあたる部分の動きが悪くなったといって、60が布団をまとったチョココロネになるのはまた別のお話。

2024.10.5